

平成 27 年 2 月 14 日

各 位

会社名 株式会社ウェッジホールディングス
 代表者名 代表取締役社長兼CEO 此下 竜矢
 (コード 2388 東証 J A S D A Q 市場)
 問合せ先 開示担当 横山 幸弘
 (TEL 03 - 6225 - 2207)

ファイナンス事業売上高過去最高、利益も急増へ

-2015 年 9 月期第 1 四半期決算開示解説といたしまして-

当社はこのたび、2015 年 9 月期第 1 四半期の決算を開示いたしました。株主の皆様、取引先の皆様、投資家の皆様、社員の皆様により簡潔に当社方針とこの四半期の決算内容をご理解いただくために以下のとおり報告いたします。

今期は大幅な増収増益を獲得いたしました。主なトピックは以下のとおりです。

- ▶ □ファイナンス事業が過去最高売上
- ▶ □G L 純利益昨年同期比 611% (タイ基準)
- ▶ □国内コンテンツ事業は端境期

1. 今期の業績の状況

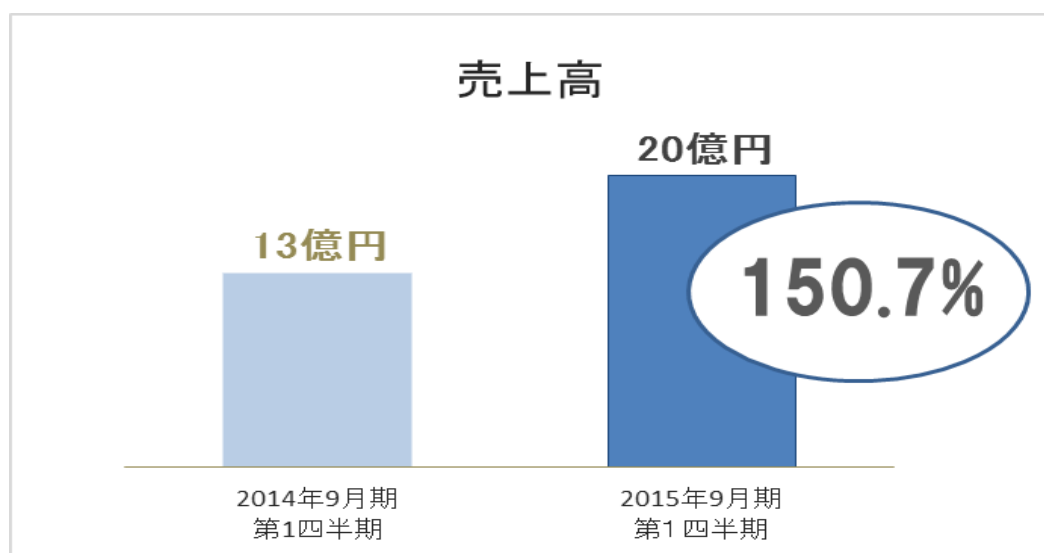
このたびの決算概況は以下のようになりました。

	(単位：百万円)				
	2015年度 第 1 四半期実績	2014年度 第 1 四半期実績	対前年比	2015年度 第 2 四半期予想	進捗率
売上高	2,084	1,383	150.7%	4,000	52.1%
営業利益	332	▲ 102	黒字化	250	132.8%
経常利益	263	▲ 50	黒字化	250	105.2%
四半期純利益	32	▲ 56	黒字化	60	53.3%

上記の結果、各セグメントの業績概況は以下のとおりとなりました。

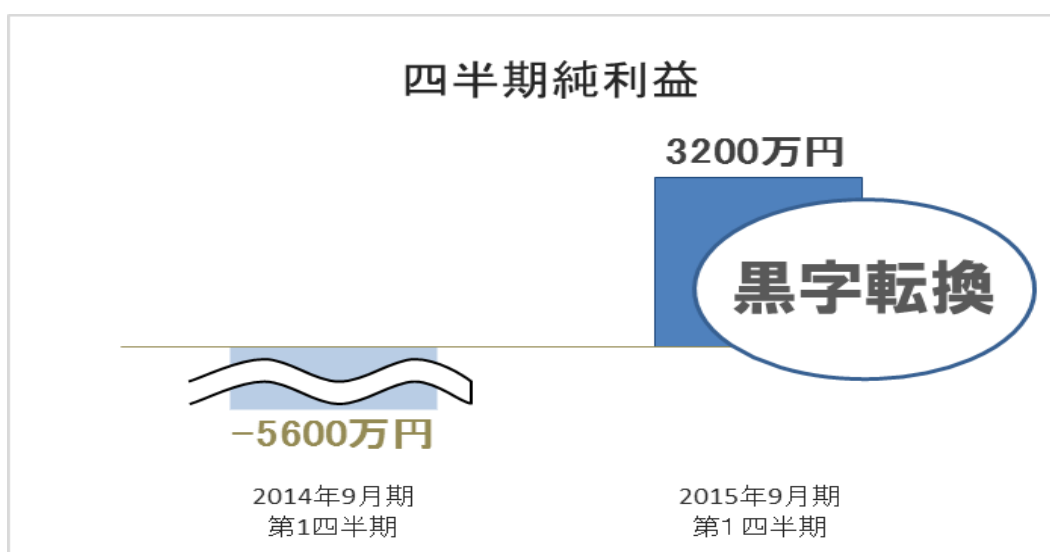
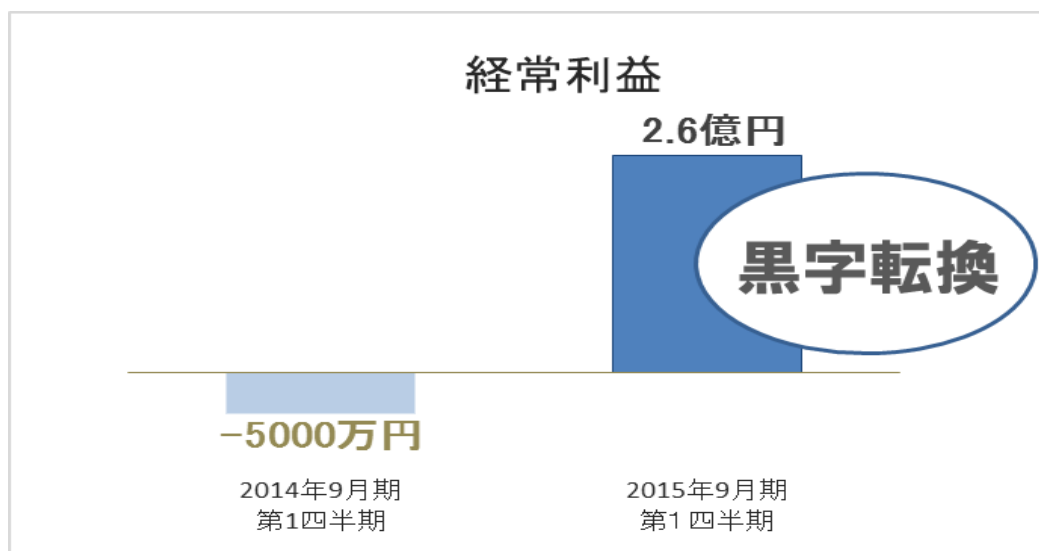
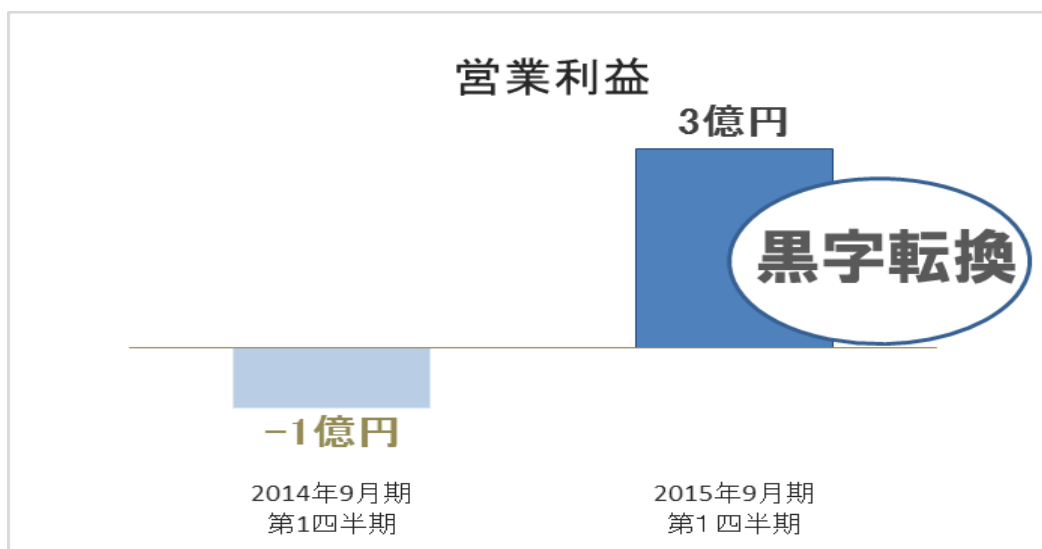
		(単位：千円)		
報告セグメント		2014年9月期 第1四半期	2015年9月期 第1四半期	前年同期比
ファイナンス事業	売上高	1,231,737	1,959,551	159.09%
	セグメント利益	▲ 6,902	388,937	黒字転換
コンテンツ事業	売上高	150,934	124,741	82.65%
	セグメント利益	45,070	23,857	52.93%

2. 全社成績の昨年同期との比較



- ▶□ タイ王国ファイナンス事業の成長
- ▶□ カンボジア王国ファイナンス事業の成長
- ▶□ コンテンツ事業は微減

これらにより、売上高が50%以上急増しました。

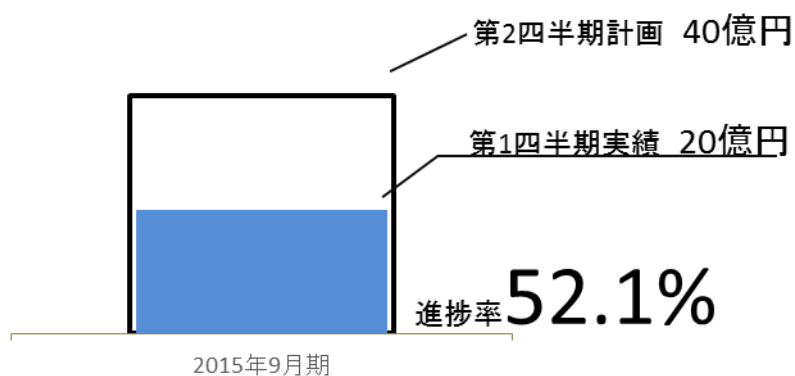


- ▶ □ タイ王国ファイナンス事業の利益率が回復基調
- ▶ □ カンボジア王国ファイナンス事業の利益化と利益増大加速
- ▶ □ コンテンツ事業の売上減少による利益減少

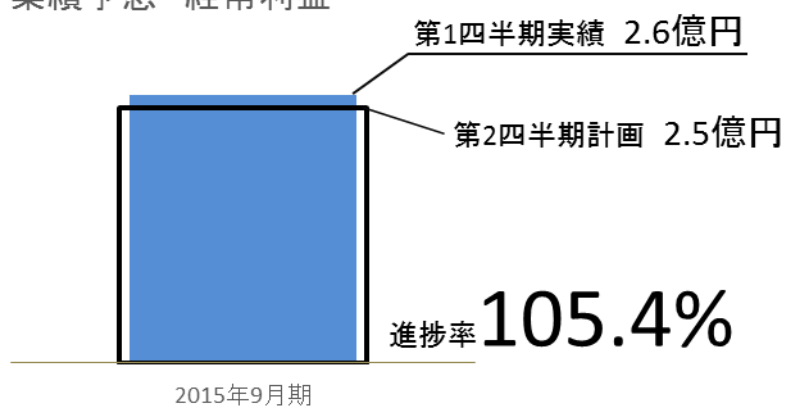
純利益においては持分法適用会社が運営するゼボラリゾートの改修に伴うホテル一時閉鎖により損失25百万円、為替差損の影響等による一時的な費用計上26百万円などが、今期において純利益を圧迫しましたが、これらの影響を乗り越えて大幅な黒字化を果たしました。

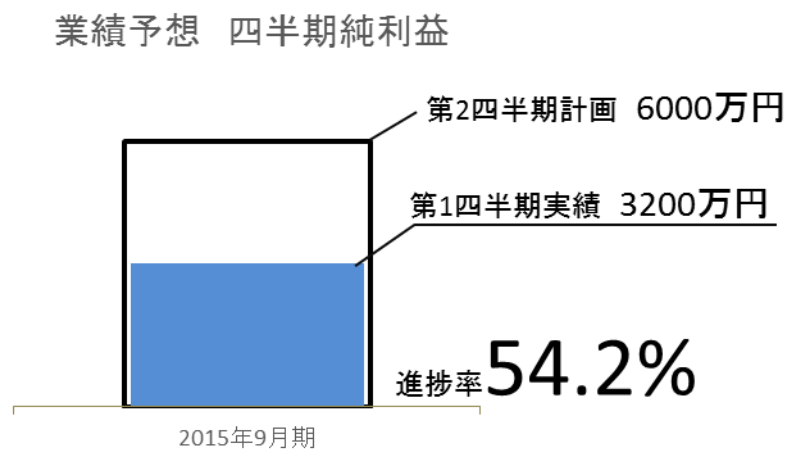
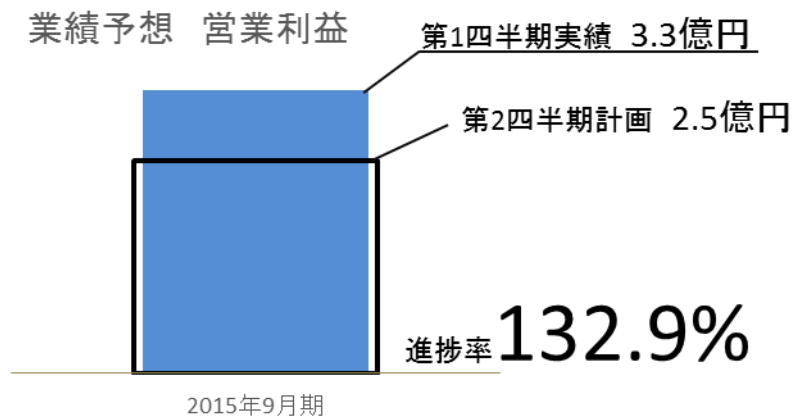
3. 業績予想に対する達成率

業績予想 売上高



業績予想 経常利益





- ▶□ 売上高は予想を超えて進捗し、この数年来の投資的事業活動の成果が明確に現れました。
- ▶□ 営業利益ならびに経常利益においては、ファイナンス事業の利益が急拡大したことにより一気に上半期目標値を超えました
- ▶□ 純利益はゼボラホテル改修に伴う投資的費用や、為替差損などの要因を乗り越えて上半期業績予想をすでに54%達成しました

4. 業績予想の今後の進捗について

2015年度の業績予想は後半において売上高、利益ともより高まる予測の元に立てられております。その方向性は変更する必要はないと考えております。なお、売上高、営業利益、経常利益、純利益を増加させる要因としては以下のものが存在します。

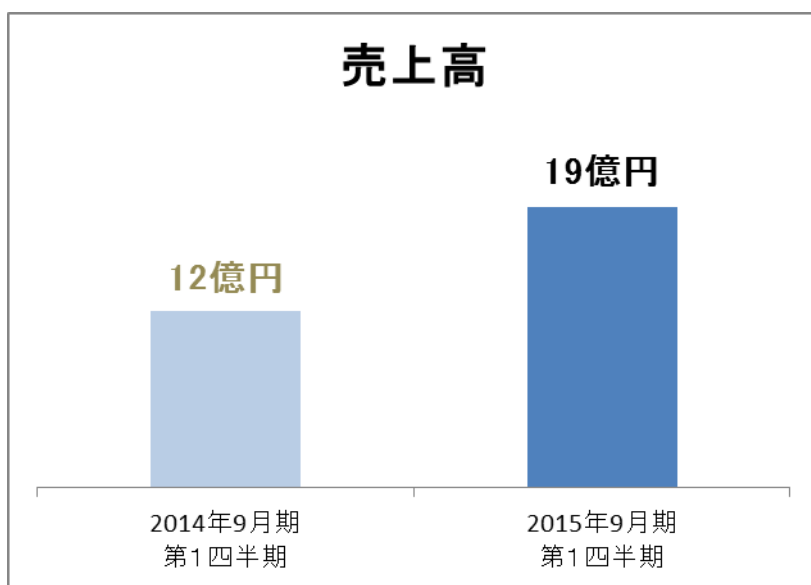
- ▶□ タイ王国内のファイナンス事業について利益率が上昇しつつあるものの、通常の利益率に向けて、さらに向上する余地が大きく、今後継続的に利益を上昇させる要因があります

- ▶□ カンボジア王国のファイナンス事業については急速に成長しており、且つ利益率もタイ王国よりも高いと予想されるため、今後継続的に売上高や利益を上昇させる要因があります
- ▶□ 日本国内を中心とするコンテンツ事業は、現状当社が関わるコンテンツの端境期にあり、今後新たな収益を生む新コンテンツや新事業に取り組んでいるため、今後、売上高・利益を上昇させる要因があります
- ▶□ 持分法適用会社の運用するゼボラホテルはすでに昨年のローシーズンに改装を終え、昨年末にはホテルについての国際的な賞を複数受賞するなどの実績を得ました。2014年12月は過去最高の客室稼働率を記録しており、今後、純利益を上昇させる要因があります

また、売上高、営業利益、経常利益、純利益を減少させるリスク要因としては、世界経済の不透明感ならびに日本国内の経済情勢が最も大きいと考えております。また今後とも中長期的な成長を目指して投資的活動を継続してまいりますので、大型案件が起こる場合などに利益を圧迫する可能性があります。

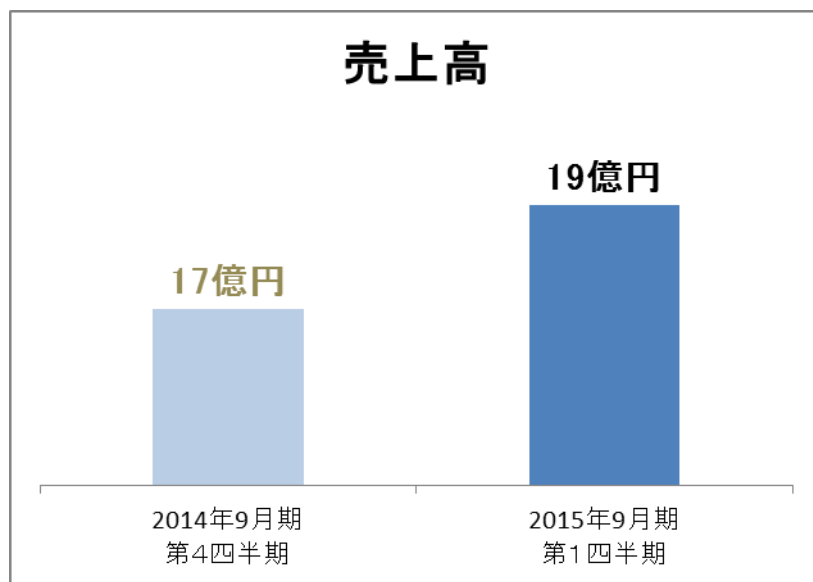
上記のように、すべての数値において順調であったため、業績予想が達成される確率ならびにこれを越える可能性は高まりましたが、昨今の世界的な地政学的リスクの高まりや、ヨーロッパ経済の混乱などを鑑みて、現時点では業績予想を据え置いております。

5. ファイナンス事業業績について

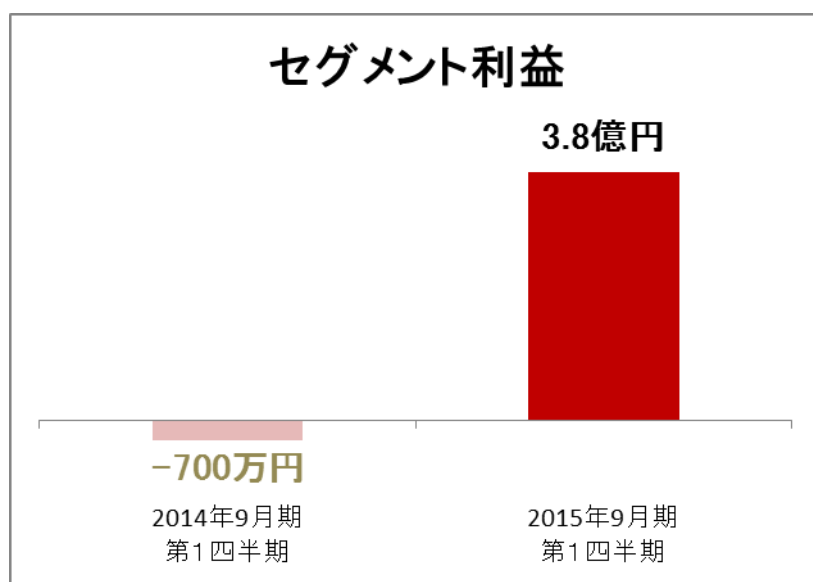


- ▶□ タイ王国における大型同業他社 **Thanaban** 社買収による営業貸付金拡大
- ▶□ カンボジア事業のオートバイファイナンス急成長による営業貸付金拡大
- ▶□ カンボジア事業の農機具ファイナンス急成長による営業貸付金拡大

などにより売上高が大きく進捗しています。これらの要因は長期に安定して売上高を押し上げ続ける要因となります。



上表のように前四半期と比べても、10%以上の売上の上昇を記録しており、毎月売上が上昇しております。特にカンボジアでのオートバイファイナンスに加えて、農機具ファイナンスが極めて好調であり、今後も営業貸付金ならびに売上高の増加が見込まれます。

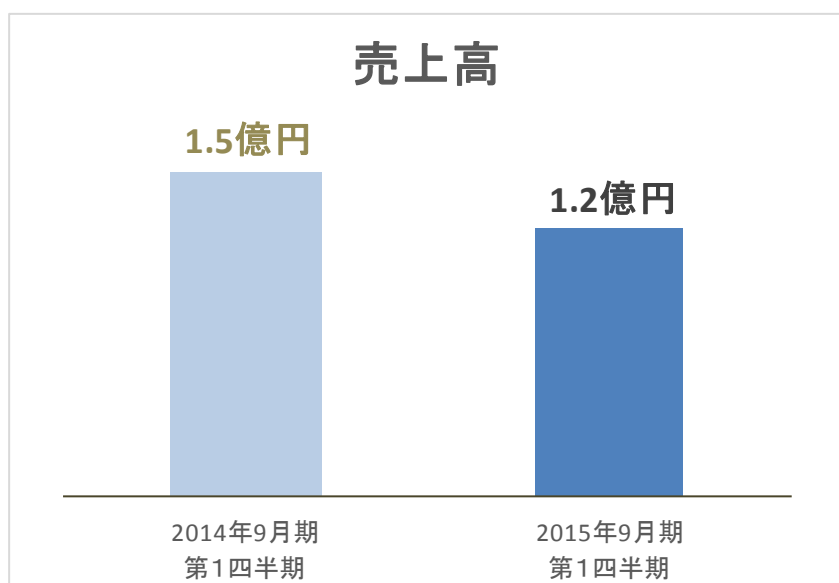


- ▶□ 上記のように売上高が急速に増加しており、利益を押し上げました。
- ▶□ 2013年末において、タイ王国内での政情不安ならびに景気後退を受け、また税務上の必要性から、遅延債権を一気に損失処理したためにセグメント損失を計上しましたが、今期においては、タイ王国の

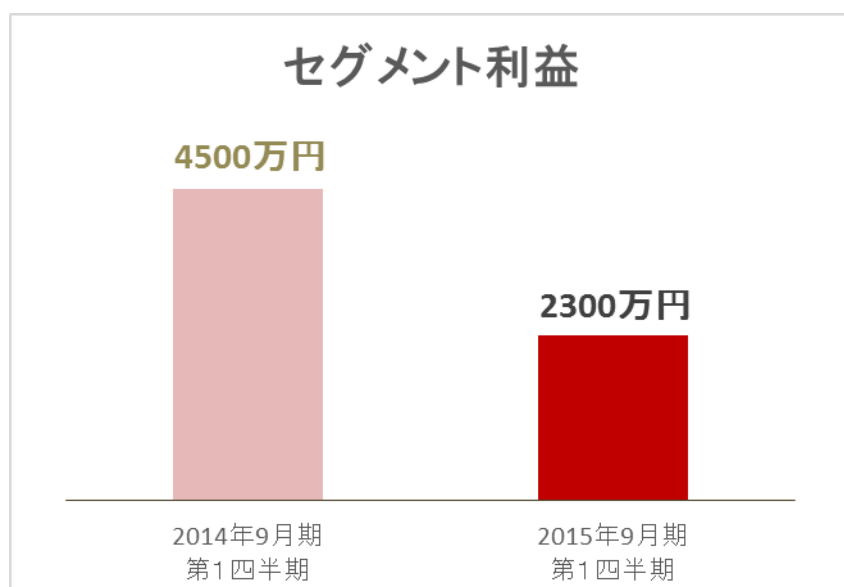
政治が安定し、遅延債権や損失計上済み債権の回収が進んでおり、収益が回復基調となりました

▶□ 2013年末には、カンボジア事業が未だ投資段階にあったことをはじめ、各種の投資的経費が多く存在しましたが、現在それらが成果を上げ、カンボジア事業が大幅に黒字化したなどの成果が出ており、利益が増加しました。

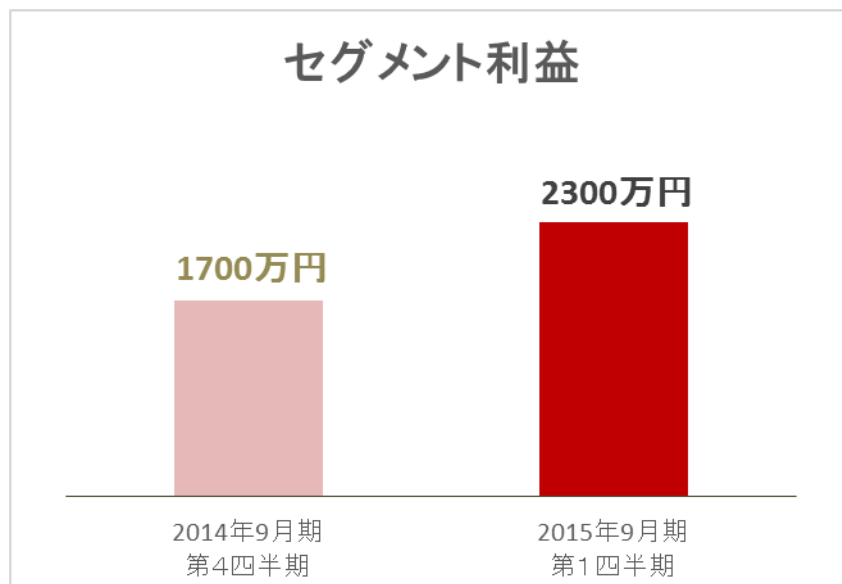
6. コンテンツ事業業績について



コンテンツ事業につきましては、当社が関わっております、各種の大型コンテンツの切り替え時期に当たり、また新規事業の立ち上げ時期にも当たったため売上高が減少いたしました。



- ▶□ 上記のように売上高が減少したことにより利益が押し下げられました
- ▶□ また今後の成長に向け新規人材の獲得などの投資的費用の投下を強く推し進めており、利益を圧迫いたしました。



- ▶□ 当社の得られるライセンス収入やロイヤリティ収入などが上昇基調にあり、前四半期に比べると利益率ならびに利益額は増加しました。

7. 今後の経営方針

ファイナンス事業につきましては、ARFC ビジョンに基づき ASEAN 全域における展開と、各種新分野でのファイナンスの展開を推し進めております。その中で進めてまいりましたカンボジア事業はすでに大きな収益の軸となりつつあります。またタイ王国内においては同業他社を大型買収し、今期の増収増益に大きく貢献しました。またカンボジアにおいては従来のオートバイリースに加えて農機具リースを開始し、急拡大を見せております。今後は CLMV 諸国へのさらなる横展開に加え、タイで開始しました中古車担保ファイナンスなどの「草の根経済を豊かにする」新分野ファイナンスの開発と発売を進めてまいります。

コンテンツ事業につきましては、「世界の時間をワクワクで埋め尽くす」を使命に、従来事業において積極的に営業を続けるとともに、電子コンテンツへの対応とリアルイベントへの展開を推し進めております。今期におきましてはこれらに加えて新規事業の立ち上げに入っており、多様な人材を確保するとともに、中長期的な事業展開のための施策を進めてまいります。

今期におきましてはこれらの施策を進める中で中長期的な急成長を実現すべく尽力してまいります。

以上